

令和元年6月10日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13196

研究課題名（和文）岩波書店における検閲と文学の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Analysis of Censorship and Literature at Iwanami Shoten

研究代表者

塩野 加織（SHIONO, Kaori）

早稲田大学・文学大学院・准教授（任期付）

研究者番号：80647280

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、岩波書店という出版社を視座に据え、1930年代から1950年代にかけてのメディア規制の実態を実証的に解明することを目的とした。そのために、岩波書店の協力を得て同書店の所蔵資料を調査するとともに、国内外の検閲資料調査を並行して実施し、収集資料にもとづく分析を積み重ねていった。その結果、戦時下の言論弾圧事件が生じた経緯の詳細が判明し、さらに、占領期に再版された図書には、内務省とGHQ/SCAPそれぞれの検閲システムの特徴を照射する働きがあることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、資料的価値と方法的価値をもつ成果を挙げることができた。まず、調査活動を通して得られた資料群は、『岩波茂雄文集』（全3巻）に活かされており、この刊行物を踏まえて研究活動がさらに展開していった点も含めて、社会的意義のある成果である。これに加え、一つの出版社を軸に据えた広範な資料調査を通して、戦前から戦後に至る言論統制の実相を具体的に析出し得た点には、方法的価値とその有意性に照らして学術的意義のある成果を挙げることができた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was to elucidate the conditions of media censorship in Japan from the 1930s to the 1950s by focusing on the Iwanami Shoten publishing house. Towards this end, we analyzed the primary materials that we collected from our visits to Iwanami Shoten's archives, and conducted comparative surveys of a range of Japanese and American sources regarding literary censorship. As a result, we were able to establish a detailed account of the wartime rise of media censorship in Japan. Furthermore, our analysis of texts published during the postwar Occupation Period revealed the distinctive features of the systems of censorship enforced by the Japanese Ministry of the Interior and the GHQ/SCAP respectively.

研究分野：日本近代文学

キーワード：検閲 岩波書店 文学 内務省 GHQ 占領期 出版 プランゲ文庫

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、尾崎名津子、十重田裕一、塩野加織の3名が、岩波書店所蔵の岩波茂雄関連資料（手稿書簡等）を調査・整理する機会を得たことが出発点となっている。一連の作業を進めていく過程において、岩波書店の創業者岩波茂雄に関する膨大な資料の中には、同書店が大正期から昭和期までに受けたメディア規制に関わるものが多く含まれていることを見出すに至った。このときの調査が契機となり、これらの豊富な資料を活用すれば、岩波書店を視座にして、大正期から昭和期までのメディア規制の実態を実証的に解明できるという手応えを得ることができた。そこで、これらの資料を素材にしなが、検閲と文学に関する研究を3名の共同研究体制のもとで立ち上げるようになった。

2. 研究の目的

(1) 2種類の検閲制度とその特質：

日本における言論出版活動は、1945年以前と以後で2種類の異なる検閲制度のもとに営まれてきた。その2種類の検閲制度とは、1945年まで続いた内務省検閲と、1945年～49年までのGHQ/SCAPによる占領期検閲である。検閲の目的や手法がきわめて対照的なこの2つの検閲制度には、共通点や継承された部分もあると考えられるが、この観点からの研究は未だ手薄である。本研究では、岩波書店の出版活動とその検閲事例を豊富な資料に基づき分析することで、戦前から戦後に至る検閲の連続性と非連続性を改めて検証しようとする試みである。

(2) 岩波書店を視座としたメディア規制の実態：

1913年に創業した岩波書店は、近代日本の知的教養基盤を支え、日本文学の形成に大きく寄与してきた出版社であり、戦前・戦中・戦後それぞれの時期で度重なるメディア規制を受けてきた。本研究は、1945年以前と以後の検閲体制の違いを踏まえた上で、岩波書店の関連資料を調査分析し、当時の規制と言論出版活動との相関性を実証的に解明することを目的としている。岩波書店という出版社を視座に据えることで、戦前から戦後までの検閲と文学の関わりを包括的に捉えることが可能になり、同書店の出版活動を基軸に据えた通時的な視点を確保できる点は、本研究の特色と言える。上述の書店所蔵資料と、国内外の関連諸機関に所蔵された検閲関連資料を収集し照合しながら、同時代のメディア規制の実態を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、1920年代～50年代における岩波書店の言論出版活動をメディア規制との関わりから調査・考察していくため、以下に挙げた3つの方法（1）岩波書店基礎資料調査、（2）当該時期の検閲資料調査、（3）調査資料の読解と分析を、それぞれ並行して進めていく方法を採用した。なお、（2）の検閲資料調査については、ひとまず便宜的に検閲体制が大きく変化する1945年を境にその前後の時期に分け、役割を分担しながら収集を行った。

(1) 岩波書店基礎資料調査：

岩波書店の協力を得て、同書店に所蔵されているメディア規制関連資料の調査を実施した。こちらの調査は主として尾崎名津子と十重田裕一が担当し、膨大な一次資料を整理した上で、翻刻も含めてデータ化していく作業を行った。また、創業者の岩波茂雄を中心とする同時代の人的ネットワークにも注目し、当時のメディア規制と関わる資料などについても幅広く渉猟することにつとめた。

(2) 内務省およびGHQ/SCAPによる各種検閲資料調査：

上記の岩波書店所蔵資料とは別に、内務省検閲およびGHQ検閲に関する資料調査を実施した。こちらの調査は主として、塩野加織と尾崎名津子が担当し、国立国会図書館、米国メリーランド大学プランゲ文庫等の国内外の関連諸機関に赴いて資料の収集を行った。とくに、プランゲ文庫に保管されている検閲文書・検閲断片資料等については、画像撮影と目録データの作成を行い、研究代表者と研究分担者間で常に共有・活用するべく工夫しながら進めていった。

(3) 調査資料の読解と分析：

(1)と(2)の調査でそれぞれ入手することができた資料を読み解き、分析に活かしていく際には、戦前戦後の連続性を見極めていくことも不可欠である。このため、一定期間のあいだにそれぞれが収集した資料を持ち寄って、研究代表者・研究分担者の全員が意見交換を行い、考察を進めていった。研究成果を発表する際にも、そのための準備の場として段階的に研究打合せを複数回実施し、互いの成果発表内容についての議論を積み重ねていった。とくに、後述するパネル発表の成果は、この方法が結実したものである。

4. 研究成果

(1) 2016年度の研究成果：

まず、尾崎が中心となって、岩波書店所蔵資料の収集と基礎データの作成に取り組んだ。この作業は、岩波書店の許可・協力を得て、岩波茂雄名義で書かれた文章をタイプした原稿や、内容見本、草稿、書簡類の貸与を受け、尾崎を中心に以下の手順でそれらをデータ化していっ

た。初出がある場合はその発表媒体を確保。本文校訂。年代不詳資料の年代特定。各資料に関する注と解題の執筆。これら一連の収集整理作業を経て、その成果は、植田康夫・紅野謙介・十重田裕一編『岩波茂雄文集』全3巻（岩波書店、2017年1～3月）刊行に活かされている。なお、この資料調査の全体を統括した十重田は、同文集第3巻の解説（「解説 回顧三〇年の時代」）を執筆し発表した。この文集には、初めて公表される文章も多く含まれており、その内容は高い資料価値をそなえている。同書刊行後にはいくつかの書評も出ており、たとえば『毎日新聞』の「今週の本棚」では、各資料の内容のみならず「近代出版文化史を知る」ことができると評価されている（張競「今週の本棚」(『毎日新聞』2017年4月2日)）。このように、今後の文学研究、出版メディア研究に寄与するものとして評価を得ることができた。

さらに2016年度は、国際シンポジウムに参加し、研究成果の発表を行った。具体的には、国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方 津田左右吉をめぐって」(2017年1月14日(土)於・早稲田大学小野記念講堂)にて、十重田・尾崎・塩野がそれぞれの研究成果を発表した。十重田の発表「二つの言論統制と対峙して」は、岩波書店と検閲の問題系について議論の整理を行い、尾崎の発表「戦前・戦中期の津田左右吉と岩波茂雄 内務省検閲と津田事件」では、津田事件の背景にあった文脈を新資料から再検討した。塩野の発表「占領期の津田左右吉 岩波新書『支那思想と日本』の検閲資料から」では、プランゲ文庫及び岩波書店で入手した新資料を用いて、津田による改稿箇所を解析を試みた。

(2)2017年度の研究成果：

2017年度はまず、国際研究集会においてパネル発表を行った。具体的には、「戦後日本文化再考」第13回研究集会（国際日本文化研究センター共同研究会（代表坪井秀人氏）、2017年6月18日(日)於・立教大学太刀川記念館ホール）にて、十重田・尾崎・塩野の3名でパネルを組み、それぞれの研究成果を発表した。発表では、「占領期メディア規制と出版文化 プランゲ文庫と岩波書店での調査を中心に」というパネルテーマのもとで、十重田は占領期に刊行された文芸雑誌『近代文学』『新日本文学』『人間』等の検閲事例を挙げ、現在までの検閲研究の動向を示した。尾崎は、前年度から調査を開始した津田事件をめぐる言論規制のありようについて、新たに入手・確認した複数の資料をもとに考察を発展させ、津田事件と岩波書店の関わりや、戦前・戦中の内務省検閲の特色を指摘した。塩野は、メリーランド大学プランゲ文庫での岩波書店関連刊行物の検閲資料をもとに、戦前に刊行された書物が占領期に再版される際の検閲のありようを、岩波文庫の事例をもとに検証した。

つづいて、スーパーグローバル大学創生支援事業早稲田大学国際日本学拠点が主催した国際検閲ワークショップ「《若手研究者によるラウンド・テーブル》検閲と文学研究の現在」(2018年1月26日(金)於・早稲田大学国際会議場第三会議室)では、尾崎が「岩波文庫への検閲について」と題し、口頭発表を行った。この発表では、本研究課題の核となる研究対象である岩波書店の刊行物のうち、内務省検閲を受けた痕跡が残る岩波文庫をリスト化し検討した。それらは現物（一次資料）に基づいて構成されており、確実なデータから岩波文庫に対する検閲の実態を浮き彫りにすることができた。また、これまでの岩波文庫をめぐる様々な言説の真偽を見極めることができた。これに加えて尾崎は、弘前大学国語国文学会にて「一人称にてのみ物書かばや」『青鞥』と検閲」と題した口頭発表および論文発表を行い、内務省検閲の処分事由である「安寧秩序紊乱」と「風俗壊乱」の不分明さや、検閲処分が外圧として機能しないさまを、『青鞥』掲載の複数の記事から浮かび上がらせている。さらに尾崎は、谷崎潤一郎作品の検閲を取り上げた論文「谷崎潤一郎の作品と検閲」を『弘前大学人文社会科学部国際公開講座2017「日本を知り、世界を知る」今こそ人文学 人間の世界をみつめるまなざし 国際公開講座資料集』に発表するなど、内務省検閲の実態解明に向けて目覚ましい成果を挙げている。

(3)2018年度の研究成果：

最終年度である2018年度は、これまでの調査内容を踏まえつつ、それぞれが追加調査を実施し、以下のような成果を挙げた。まず塩野は、「本文生成プロセスから見た占領期検閲 岩波新書の検閲事例を中心に」と題して、NPO法人インテリジェンス研究所主催第27回諜報研究会（2019年5月25日於・早稲田大学）での口頭発表を行った。この発表ではまず、占領期の検閲システムを書き手自身が内面化していくプロセスと、当時の出版機構との関わりを指摘した上で、岩波新書の複数の検閲事例に注目し、新書という刊行物特有の処分のありようとその影響を検証した。その上で、GHQ/SCAP組織体制における民間検閲局の位置づけと変化を辿り、当時の検閲は、G2参謀部の隣接部門である民間情報教育局の思想教育プロパガンダと表裏の関係をもちながら機能していったことを明らかにした。

また尾崎は、論文「津田事件の文脈 内務省検閲と岩波書店」(『人文社会科学論叢』弘前大学人文社会科学部、2019年2月)を発表し、津田左右吉の著作が内務省により発売頒布禁止処分となった津田事件を、岩波書店所蔵資料等から丹念に辿りなおすことで、これまで明らかにされてこなかった当該事件の背景とその文脈を具体的に析出した。さらに尾崎は、岩波文庫の戦前戦後の検閲資料調査を踏まえて、内務省委託本調査レポート第18号「岩波文庫に対する検閲を通して見る、様々な検閲の主体」(千代田区立千代田図書館、2019年1月)を発表した。このレポートでは、内務省検閲を受けた岩波文庫のうち武者小路実篤『その妹』を取り

上げ、戦前版から戦後版への本文の変容を指摘した。

いずれも、第一年目に収集した岩波書店資料を活用しながら、内務省検閲と占領期検閲それぞれの特質について実証的側面から明らかにすることができた点は大きな成果である。なお、本研究課題を推進する過程で入手した資料や知見については、今後さらに新たな成果として発表する準備を進めており、この3年間での達成をこれからの研究にも積極的に活用していきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文等](計5件)

尾崎名津子「津田事件の文脈 内務省検閲と岩波書店」、『人文社会科学論叢(弘前大学人文社会科学部)』、第6号、2019年、pp.311-326

尾崎名津子「岩波文庫に対する検閲を通して見る、様々な検閲の主体」、『「内務省委託本」調査レポート』第18号、2019年、pp.1-7

尾崎名津子「一人称にてのみ物書かばや」、『青鞥』と検閲」、『弘前大学国語国文学』、弘前大学人文学部、2018年、pp.1-19

尾崎名津子「谷崎潤一郎の作品と検閲」、『弘前大学人文社会科学部国際公開講座2017「日本を知り、世界を知る」今こそ人文学 人間の世界を見つめるまなざし 国際公開講座資料集』、2017年、pp.1-9

十重田裕一「解説 回顧三〇年の時代」、『岩波茂雄文集 第3巻』、岩波書店、2017年、pp.319-334

[学会発表](計10件)

塩野加織「本文生成プロセスから見た占領期検閲 岩波新書の検閲事例を中心に」、『NPO法人インテリジェンス研究所第27回諜報研究会、2019年5月25日於早稲田大学

尾崎名津子「岩波文庫への検閲について」、『スーパーグローバル大学創成支援事業早稲田大学国際日本学拠点「国際検閲ワークショップ」』、2018年1月26日於早稲田大学

尾崎名津子「一人称にてのみ物書かばや」、『青鞥』と検閲」、『第59回弘前大学国語国文学会研究発表大会、2017年11月26日於弘前大学

尾崎名津子「谷崎潤一郎の作品と検閲」、『弘前大学人文社会科学部国際公開講座2017「日本を知り、世界を知る」』、2017年11月3日於弘前大学

塩野加織「再版図書と検閲 岩波書店図書資料調査より」、『国際日本文化研究センター「戦後日本文化再考」第13回研究集会、2017年6月18日於立教大学

尾崎名津子「津田事件の文脈 内務省検閲と岩波書店」、『国際日本文化研究センター「戦後日本文化再考」第13回研究集会、2017年6月18日於立教大学

十重田裕一「闘ぎ合う占領期雑誌とメディア検閲」、『近代文学』『新日本文学』『人間』の事例を中心に」、『国際日本文化研究センター「戦後日本文化再考」第13回研究集会、2017年6月18日於立教大学

塩野加織「占領期の津田左右吉：岩波新書『支那思想と日本』の検閲資料から」、『国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方 津田左右吉をめぐって」』、2017年1月14日於早稲田大学

尾崎名津子「戦前・戦中期の津田左右吉と岩波茂雄 内務省検閲と津田事件」、『国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方 津田左右吉をめぐって」』、2017年1月14日於早稲田大学

十重田裕一「津田左右吉と岩波茂雄：二つの言論統制と対峙して」、『国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方 津田左右吉をめぐって」』、2017年1月14日於早稲田大学

[図書](計3件)

植田康夫、紅野謙介、十重田裕一編『岩波茂雄文集 第1巻』、岩波書店、408頁

植田康夫、紅野謙介、十重田裕一編『岩波茂雄文集 第2巻』、岩波書店、368頁

植田康夫、紅野謙介、十重田裕一編『岩波茂雄文集 第3巻』、岩波書店、440頁

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：尾崎 名津子

ローマ字氏名：OZAKI, Natsuko

所属研究機関名：弘前大学

部局名：人文社会科学部

職名：講師

研究者番号(8桁): 10770125

研究分担者氏名：十重田 裕一

ローマ字氏名：TOEDA, Hirokazu

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号(8桁): 40237053

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。